



「なぜ先生になりたいのですか？」

『ハイ、子どもが好きだからです！』

「君ねえ、子どもが好きだけで勤まるほど甘くはないんだよ〜」…

教員採用試験の面接での様子。本当はこんな単純なやりとりはないらしいです。言わばこれは都市伝説。

実際、子どもが好きだけでは教師は勤まりません。が、子どもが苦手で嫌いな人が教師になれば、これほど不幸なことはありません。かつて勤務した学校で、

「小さい子は苦手。みんな同じ顔に見えるから名前を覚えられない」と言ってはばかりない方もいました。

アメリカインディアンの教え

— 子どもたちはこうして生きかたを学びます —

批判ばかり受けて育った子は非難ばかりします

敵意にみちた中で育った子はだれとでも戦います

ひやかしを受けて育った子はいかにかみ屋になります

ねたみを受けて育った子はいつも悪いことをしているような気持ちになります

心が寛大な人の中で育った子はがまん強くなります

はげましを受けて育った子は自信を持ちます

ほめられる中で育った子はいつも感謝することを知ります

公明正大な中で育った子は正義心を持ちます

思いやりのある中で育った子は信仰心を持ちます

人に認めてもらえる中で育った子は自分を大事にします

仲間の愛の中で育った子は世界に愛をみつけます

作・ドロシー・ロー・ノルト/訳・吉永 宏

加藤諦三著・アメリカインディアンの教え・より

親が子どもを愛するのとはちがい、教師が子どもを好きか否かは、その職業意識や責任感、あるいはモチベーションもかかわってきます。そしてその判断は、教師自身ではなく子どもがするものだと言えるでしょう。心から子どもが好きである。あるいはたてまえとして、それとも責任や義務を果たすために演じている。そこのところはいろいろありましようが、こうも面と向かって「子どもが苦手」なんて言われると、こちらとしては引いてしまいますね。『じゃあ、なんで教師になったの？』とそのときは心でつぶやいたものです。

“仕事のすばらしさを親の背中で教えられた子は同じ仕事に就きたいと思います”

作・マサシ・ウエダ

子どもが苦手の方のお子様は、教師になっているのでしょうか。